WASON HQ ... May 1891 no. 266

女學雜誌

第二百六十六號
明治二十四年五月廿三日發兌

金森通倫君に與ふ
國家主義
小公子　若松しづ子
朝日屋
女學生の理想の續

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 266. MAY, 23TH. 1891.

EDITORIAL :—The Nation and the Individual.

WORD AND DEED :—

CHILDREN'S COLUMN :—"Little Lord Fauntleroy." (A Translation.)

MISCELLANEOUS :—The School girls Ideal. The Philosophy of Conjugal Love. "Sofukō" (A Poem.) Gladstone's Religion.

CONTRIBUTED ARTICLES :—A Letter to Rev. J. Kanamori.

NOVEL :—The Courtship of Miles Standish. "Shikai no Arashi." (A Story of presecution in Japan in the 16 Cen.)

THE HOUSEHOLD :—Household Economy at Asahiya.

CRITICAL NOTES :—"Kateidokuhon." (A book for home-reading.)

NOTES AND NEWS.

QUESTIONS AND ANSWERS.

CONCERNING WOMEN.

NAMES of Gradates from Different Girls' Schools in the Empire (3).

第二百六十六號目次

社說　國家主義及個人主義

言行　寛容○愛隣○災害

兒監　小公子(若松しづ子)

雜錄　女學生の理想○戀愛之理○想夫行（靈峰子）完結○具氏の宗教○

開書　金森通倫君に與ふ(山路彌吉)

小說　マイルス、スタンデッシュの戀(愛山逸民)○紫海の嵐(みさを)。

家政　朝日屋の經濟

批評　家庭讀本

時事　陛下還御奉迎○正義眞勇○新聞紙○商業會議所

問答

通信

女報

週報

廣告

高梁の人**增田勇女**初め三度腹部裁斷治療を受け、去年當地大學病院に入りて二度び腹部裁斷治療を請ひしが、宿痾療えず、追日極めて危篤なり、同女史が熱信清勇高潔の德、世汎く知らずして人の切に知るもの多し、故に慷歎して之を知友に告げ且つ熱禱同情を求むと云ふ。同女史と主にありての一同胞、告ぐ。

明治女學校卒業生會

明廿四日午后四時半より我校に**大學祈禱會**例會相開候特に同日は來月可催我校の音樂會の事に付協議致度に付繰合せ是非とも來會有之度候。委員

羽生氏結婚の節金色のエリどめ一個遺失の方有之其后心當り一々相伺へども分明ならず、御心付の人は齋藤方迄御申込被下度候

轉居　飯田町六丁目二十六番地　**岡田起作**

女學雜誌の第二百六十四號紙上には**二宮尊德翁**の偉事及人物に付き高潔なる記事あり、世上同翁の如き近世の大道德家を知るもの稀なるは、遺憾とすべし、尚ほ殘册あるに付、購讀一覽あらんことを請ふ。

第三版

百人一首講義

上製美本　五十錢　郵稅四錢
並製淡裝　三十五錢　同　四錢

青夏の讀書に宜し　歌留多遊びに宜し
遺物に宜し　詩歌に宜し

女學雜誌社

女學雜誌 第二百六十六號 明治二十四年五月廿三日發兌

社説

國家主義及び個人主義

數年前迄は、連りに個人主義と叫ぶ所ろの聲を聞しが、一二年來は、國家主義と云ふ新稱號代りて流行せり。敎育者などの仲間には評判ことに喧びすしく、吾こそは國家主義なれと云はゞ、何となう肩身の廣き心地すと思はれたれ。政治家に至りても、亦此の流行をなほざりにせず、吾は國家主義の政策を執ると吹聽して、壯士の愛顧を得るの方なきにあらず。然るに、抑そもその國家主義とは如何やうの事を言ふにやと窮問すれば、漠として明答を得ず。吾人屢ば其聲を聞けども未だ嘗て之と云ふ解釋を聞かざる也。

果して何事をか言ふらん、心中なかく〵に不審なれども、扨て何人も特更に吾人が惑ひを解き玉ふとあるまじければ、敢て疑がふ所を告白し、世上の論者に質さんと欲す。

先づ個人主義と云へることに付ても、頗ぶる疑がひあり。人間世に生れ、個々獨自一己の意識を有す。たとひ、唯物論唯心論などの議論はありと云へど、實際世界に居て、何人も我と彼とを混ずるものはあらず。而して彼は彼たるの責任を負へるが如く、我は我たるの責任を負へり。道德も此によりて立ち、法律政治も之によりて立つ。左らば、世上に存する人一己より觀じ來り、我れと云へるものほど、確實にして且つ重大なるものはあらず、我れありて而して后ち万法立つ、我れを外にして何ものを求めんや。此の意義を以てせば、個人と云へることを、第一の主義とするは、固より當然なり。

然るに、此の我れなるものは、敢て單獨孤棲することを得べからず、必らずや他に友あらんことを求む。亦此の我れあるものは、自己を愛すると共に他を愛せんことを欲し、他人の爲に命ちを捐てんことを欲す、本來自づからにして犧牲獻身の念あるなり。亦此の我れあるものは、治安平和を所望す、故に、家に和樂し、國に大平し、社會の治まり安んぜんことを熱望す。此類他に對するの需めは、我れに存ずるの天性にして、即はち、我れの一部なり。然らば、個人を主義とするものは、亦

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

た博愛を主義とし、獻身を主義とし、家國の平安を主義とせざるを得ず。此に至りて個人主義と、國家主義との相違果して何處に存するやを知らず。

然るに、國家主義々々々々と叫ぶものあれば、個人主義の人は連りに之を駁擊するの躰なり。然らば、兩主義は、到底相合わざるものか。何事の相合わざるか、吾人之を知らず。

但し、個人主義を論ずるもの、今の世に聞ゆること稀なり、故に、吾人は此上に問ふことをせじ。今の流行ものは、國家主義なり。國家主義よ、願わくは聞け。

汝が名によりて慷慨するもの多し。汝は、即はち慷慨の母か。左れど、汝の外に慷慨を産むものなきにあらず。汝が名によりて、愛國家ありと稱するものあり。汝は、即はち愛國心のパテントを有する乎。左れど、自己を重んずることを知りて、而して國を愛したる者古來到る處ろにあり。汝が名によりて、帝室の忠臣なりと號するものあり。帝室と國家と同じき乎。憲法の明記する所ろ、國家と帝室とは異なり。魏徵云く願わくは良臣たらしめよ、忠臣たらしむる勿れと。左れば、國家を主義とするもの必らずしも忠臣にあらじ。あゝ、國家主義、汝は抑そも何ぞ。

敎育者の云はく、國家主義の敎育と。國家主義の敎育とは、抑そも何如ある敎育ぞ。昔しは、ペスタロッヂ率先して開發主義を唱出せり。今の日本の敎育家も、大抵は此主義を嘉みすと聞へたり。扨て、開發主義の敎育によりて、人を國家的に敎育すとは抑そも何如ある謂ひぞ。人は生れ乍ら國家と云へる觀念のみにて充つるものにあらず、亦國家と云へる觀念が最重最强なるものにあらず。人は本來國家的の思想を有せり、左れど亦た個人的の思想をも有す。人は國家の爲めに死することの潔ぎよきことを知れり、左れど自個良心の煥發する所ろを確認し、全國家に逆らふことも尙ほ自己を嚴守することの極めて高尙あることをも能く知れり。亦た國家に忠なることの雄々しきことを知ると共に、全世界に博愛にして、眞理に忠實なることの至つて美々しきことをも能く知れり。而して如此き智識は、啻に其の外より學び得る所ろにあらで、人類天然の稟性に於て深く刻銘せらる。故にもし、其性のまゝに之を伸せば、此類本受の稟質皆な開發せずと云ことなけん。此時に於て先生あり、たゞ其の國家的の天質をのみ敎養し、敢て其他を壓止せ

んとす。かくして、開發的の教育と云ふとを得べき乎。開發的なるとならざるとは暫らく論ぜず。斯して、能く圓滿せる人を發成せしむるとを得べき乎。一糸をのみ引きて、万糸伸びよと云ふと能わず、片肢をのみ養なつて全躰肥えよと云ふと能わず。人をしてたゞ國家的ならしめんとす。たゞ國家的の人とは、何如なる人ぞ。國家に不都合ありて、其政治、眞理に違ふときは、何如にすべき。政治に逆らつて、眞理を守べきか。然らば是れ眞理を主義とするものにして、國家を主義とすとは言ふ可からず。先づ、眞理を尊とむにもあらず、兼て自己を重んずるにもあらず、廣く人類を愛するにもあらず、漠然國家主義と稱して、万事を我國家と云へる小觀念にて料理せんとす。大なるに似て是より小なるはなく、忠なるに似て之より狹きはなし。如此き僻人物を養成して、之を國家に益ありと云ふ。人を一種の摸型に製造して人物出て來にたりと喜こぶ。吾人は如此き片環に感服せざるもの也。

個人主義の說亦た僻して、只管ら自己をのみ重しとなし、自利自慾を旨とするを、個人を主義とするものと誤認するに至りて、其弊や極まれり。國家主義の宣言は、之が反動として世に現はれたり。

反動の起りたる當時は、多少前代の通弊を救ひたる績しありき。個人主義と云ひて、國家あるとを忘れ、個人主義と云ひて愛他の念を失なひたらん如きものは、國家主義の叫びによりて膽を消し、深く改悟して、邪念を一轉したるものもあるべし。此類幾分の功なきにあらず。

左れど、乾は坤に反りて、反動此方より彼方に移り、今や亦た國家主義と云ふとの流行、極端の弊に達せり。分もなく、國家主義々々々々と連叫して、美術にも、道德にも、眞理にも國家主義なるものありと誤想し、揚々として宣言せり。抱腹の至りに堪へず。

かくして、西野文太郎を出し、來島恒喜を出し、津田三藏を出し、切りに國家主義と叫びたる教育家は、國家主義を誤解したるもの丶刃にかゝり、國家主義を利用せんとて暗殺者を神社に祭りたる政治家は、亦た國家主義の狂人の爲めに東奔西走の勞を執らざるを得ず。國家主義に人を養成せんとすれど、人は天性を曲げて、万事たゞ國家のみと思ふと能わず、其の教育は無理なるがゆえに、敢て行なわるゝとなし。茲に

於てか。〇〇を利用し、かけまくもかしこき氣に裝ほふて、僞善を以て小年を訓陶せんとす。少年則はち迷はされて追々偶像禮拜的、僞忠臣僞愛國家的となり了せんとす。もし此に至れば、其教育家も神輿の放り出さるゝが如く放り出され、若いものゝ喧嘩遂に治まらさるに至らんとす。其日の近きも、彼等が眼とには映ぜざるなるべし。

吾人思ふ、國家主義と個人主義とは矛盾するものにあらず、兩主義併び立つて初めて完きを得べし。愛國主義と博愛主義と矛盾するものにあらず、兩主義相待つて初めて正準に適ふことを得べし。たゞ其一端を擧げ、人性を矯めて激しく之に偏せしめんとす、僞曲僻屈の痼癖もちは之が爲に出づれば、完人物は生れず、邦家をたゞ片環ものゝ集合場となして、日本は永久に文明の國たることを得じ。

國家主義の說法者よ、汝が頭べの上に鞭を蒙むりたるは既に幾遍、近時更に大ひに覺る所ろあるべし。最早や過ちに氣付き、早々隱居すべき時なり。

(婚姻論) 次號より其長篇を揭載す。

言行

○寛容　他人の過ちを寛容せよ、何となれば、汝自身も亦た他人の寛容を請ふべき多くの過ちあれば也。汝自身も心に願ふ所ろの如く自から行ふこと能わず、況して其願ふ所ろの如く人をして行はしむることを得んや。(トマス、ケムピス)。

○愛隣　汝ち隣を愛せよ、隣とは誰れぞ。吾が近づく所ろ、吾に近しき所ろの人是れ也、故に、第一は、家族なり、妻は夫に、子は母に、妹は兄に、主人は婢に、皆な隣として之を愛せざる可らず。次に、我が町、我が都、我が國の民など、何れか隣人にあらざるべき。此他、時ならぬ不運により、迷ふて我戸の前に來るもの、困じて我近くにさまよふもの、我すでに之を見たり、我すでに之に近し、安くんぞ亦た我が隣り人にあらざらん。我等はすべて此等の隣人を愛せざる可らず。(スタンレー)。

○災害　災害來る、一と度び雄々しく之に逆らひ向ふときは、すでに大ひなる望みを生ず、此に於てか、災害なるものは既に善德の一種となりぬ。(カーライル)。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

兒籃

小公子

第五回（上）

若松しづ子

編者云はく、しづ子女史久しく病氣の爲め、續稿出でざりしが、近頃やゝ快ちよしさて、試みに一篇を物し、送り玉へり。則はち左に掲ぐ。第四回の下は、二百三十七號にあり。煩はしくとも、引合せて覽玉はんことを祈る。

それ故セドリックは、自分か年をとるまでは分らない理由があつて、かふいふ都合になつてゐるので、大きくなれば、それが話して貰われることと思つてゐました。尤とも不審に考へられるとは考へられましたが、必竟何故に母と引別けられるといふ其譯が、此子供に左ほど氣になるのではないのでしたから、母が丁寧に幾度も繰反して、色々といひきかせて慰め、なる丈樂しい方を思はせる樣にいたします中に面白くない方は段々と消失る樣にありました。併し折々妙な風をして、海面を眺めながら、まぢめ貌に大層考へてゐる處を、ハヴイシャム氏が見たことが有りました。又そういふ時には、小供には似つかはしからぬ歎息の聲が聞えました。ある時はハ氏例の尤もらしい樣な振りで、談をしてゐまして、こふいひました、

僕はどふもそれが嫌なんです、どの位嫌だか、あなたが知らないほど嫌です。ですが、世の中には色々苦勞があるもので、誰でも辛抱しなければならないつてネ、メレもよくそういひ／＼しましたし、ホッブスおぢさんもそういつたとが有りましたよ。それから、かあさんがお祖父さまのお子がみんな死んでしまつたんで、それは大そう悲しいとだから、お祖父さまと御一處にゐるのが好にならなくつちやいけないつて、そういひましたよ。ネイ誰だつて子供がみんな死んじまつたなんていへば、氣の毒ですハネイ。おまけに、一人は急に死んだんだつて。

此若侯と知己になつた人々をいつも悦こばせた者とは、何か談話に身が入つた時の調子づいた風采と、ませた物云で、殊にくり／＼した幼な貌の、極あどけない處と、仔細らしい處に、言ふに云はれぬ興味があつたのでした。實に眼のさめるほど奇麗なセドリックが、可愛いゝ姿で、チッヨト腰をかけポチャ／＼した手で膝を抱へ事有り氣に話をしてゐるのを珍重して、聞かぬ者は有りませんかつた。追々ハ氏でさへが、セドリックと同行するのを、内々大層樂しむ樣になりました。ある時、ハ氏が、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

それなら、あなたは老侯が好になる樣にして見やうと思し召すのですか？。

と云ひ升と、セドリックが、

エー、だつてお祖父さまは僕の親類でせう。誰だつて親類が好でなくつちやいけませんは、それから、お祖父さまは、僕に大變親切なんですもの。人が色んなとして呉れて、何んでも好なもの遣るなんていへば、親類でなくつたつて、好になるでせう。だけれど、親類でそんなにして呉れば、尚好になるじや有りませんか。

と云ふのを聞いてハ氏が試みに問いました、

どうでせう、お祖父さまは、あなたが好でせうか？、

セドリックは何氣なく、

エー、好でせうよ、だつて僕は又お祖父さまの親類なんでせう。それから僕はお祖父さまの息子の子供でせう。だから好にきまつてるじやありませんか。好でなきやあ、僕の欲しいものなんでも遣るなんて云ひやしませんだろう。そうして、あなたを迎ひになんか、よこしやしませんじやあいか？。

ア、、なるほど、そういふ譯なのですか？。

エー、そうですとも、あなただつて、そうだと思ませんか？孫の好でないお祖父さまなんか、ありやしませんでせう。

さて船酔で引籠つて居つた人々も、追々甲板の上へ出て來て、長椅子に寄つてゐて、いづれも船中の徒然を感じて居升たが、誰云ふとなく、フォントルロイ殿の小說めいた履歴は、一般に廣まり、毎日船中をかけ廻つたり、母か又たは彼の痩て脊の高い、老成代言人と運動したり、水夫などゝ話をしてゐた彼童兒に注意せぬものはない位でした。セドリックは誰にでも氣に入られました。行く處に近しい人が出來ました。甲板を運動する紳士がセドリックを呼んで、一處にと申しました時などは、凜然しく大またに蹈み出しまして、冗談を云はれれば、矢張り其調子で、面白い返答をいたしました。又セドリックが、婦人たちと談話をする時分には、取圍んだ一群のなかにキッと大笑をして打興じることが有りました。又セドリックが同船の子供たちと遊べば、何か極く珍らしい遊戯がないといふとは有りませんかつた。水夫の中にも心易いものが大分出來まして、海賊や、破船や、無人島に漂泊したなどの

得も云われぬ面白い話しを聞きました。丁度自分が持つてゐたおもちやの舟で、帆を擧げるとや、繩をつなぐとや、水夫どものつかふ外では聞なれぬ言葉なども、驚くほどよくおぼえまして、例の何氣ない調子で、妙なとをいつては、紳士や貴婦人たちに笑われるとが、まゝ有ました。そして、笑われば何故かと、ビックリする樣子でした。中にもよく話をして聞かせて呉る人チェーレと云ふ水夫で、此爺の實驗ばなしを聞て見ると、何でも二三千回も航海したかとおもわれる樣で、其度〻に人を殺して食べるといふ鬼の樣な恐ろしひ人の住んでゐる島へ、漂着したそうで、又其話の續を聞いてゐると、チェーレは身を切られて燒いて食われた事も度々で、頭の皮を剝れたとさへ十五回や二十回は有つたそうでした。セドリックは、母に此話をして聞かせて、こういひました。

それだから、あの人があんなに頭が禿てゐるんですよ、ダツァ幾度か頭の皮をむかれゝば、モウ髮がはへやしませんから子、一番しまいに、パロマチヤウイーキン人の王が、ウオップスレマンプスキイ人の酋長の髑髏で拵らへた、庖丁でやられてからは、髮が生へませんかつたと。此時ほど危ないめにあつたとはマアないんですと、其手に庖丁を振まわされた時は、大變とビックラしたもんだから、かみの毛がチヨッキリおつ立つちまつて、どふしてもねませんかつたとそうして其王が今其まんまでチェーレの皮を被つてゐて、丸でブラシの樣ですと。かあさん僕はチェーレおぢのした樣な經驗した人見たとがないんです。それでホップスおぢさんに、すつかり話してやり度つてたまらないんですよ。

時々天氣がわるくつて、人々は甲板へ出られないで、下の座敷に閉ぢ込られてゐる時セドリックに勸めてチェーレのけんけいばなしを話させました。スルト、セドリックは、大層得意な調子で、熱心に話しをしましたが、一同擧つて面白そうに聞いてゐる處を見れば、凡そ大西洋を渡つた人の中でこれはと人に珍重されたものが、あろうかと、おもうほどでした。何んでも人の興になろうとおもへば、及ばぬながら、心よく自分の出來る丈けはして見ようといふ風で、あとけない中に、自分は決して角へ置かれぬ人物とおもふ樣子が、尙ほか愛いゝのでした。チェーレの話しをし終つてから、母にかういひました。

七

アノチ、かあさん、みんなはチェレの話しを大層面白そうに聞いてましたよ。ダケレド、かあさん、アノ僕は……ヒヨットしたら、そんなといふのは、わるいかも知れないが……みんなほんとうじやないかも知ないとおもふ時が、あるんですよ、みんなチェレが出逢つたとじやないかと、おもひ升よ。デモみんな自分だつていひますね、どふも、妙ですネ、かあさん、アヽヒヨットしたら、少し忘れてまちがふのかも知れませんよ。度々、頭の皮をはがれたから。幾度も頭の皮をはがれゝば、忘れつぽくなるかも知れませんはネー。

雜錄

女學生の理想（二）

中の組（高等小學卒業后一年生徒年齡平均十四歲乃至十七歲程）

問。當今女生の務として、

何事を最とも重しとする乎。

(一)。女子の職務は開化の度と國の風俗とに因りて異なる。今の我邦にては女子の程度を高くするにあり（言葉足らず、思ふと言難し）。公けに女子が爲すべき事、今は左程必用なりとも思はず第二につくもの也。人々各々望みを異にし小說家となり、醫となり、敎師となるなど樣々あれど、妹等は一家の妻となり、家內を修め、子を敎育して他日國家の用とならしむるをば、尤とも必要なりと思ふ。かくすれば、自づと女權も擴張す。此の目的に隨がひて女子敎育せらるれば、女子の程度高くあり、其內に、愛國の精神、社會改良の爲に我身を犧牲にする事、一家を好く修めホームに暖かき空氣を滿たすことなども含めり。（妹今は是と云ふ確き目的はなけれど常に思ふと斯の如し）。

(二)。女子は衣服を飾るを以て己の飾とせず、たゞ心の中に美くしき女德を備えて飾とし、總ての事柔和にして男子にかわり內部の天職を致すべき樣、敎への文にも相見え、常に喜こびて復讀いたす處にて候、さらば今日に於て外にも內にも働らくべき務は多けれど、先づ女は前の言葉により內部の務を致し神の大御心に適ふ生涯を送り度常に望み居り、只今信ずる所ろを一言述るのみ。

(三)。妾の如き田舍に生長し、人たる道を知らず、たゞ學問の

みせば宜しきと思ひて出京し、幸にして此校に入り日々德育上の講話を伺ひ、初めて夢の覺たる如し、何如に學問ありとも、愛なくば何の益もなく、又上帝を崇めねば人の道を守りがたしと知り侍りぬ。されば、及ばずながら國に歸りて此事を人に語り、たとひ公けに働らくほどの事はせずとも、漸やくに他に及ぼさんことを祈り候。されど、考へ未だ足らず、日々研究し、益々高尚の考を持んことを望む。

（四）或人の言ひし如く、女子は實に天然の教育者にして、其最とも重しとする所ろは人を教育するにあり、然れど其方法に種々ありて一定せず、妹思ふに眞の教育は決して場所によりてあるものにあらず、何處にても出來申さんか、家にありて能く父母に仕へ、良人を助け、子を教育して日本に必要適當なる人物を多く出すも亦教育にて、此事今日尤とも大切なり、然るに徒に教育は學校のみにて行ふべきものと思ひ、女學生濫りに獨立を稱へ、書生を教ゆることをのみ名譽とするは大なる誤りと信ず。なほ教育するほど重く且つ樂しきはあらずと思はる。されど妾未だ深く學びしにあらざれば、益々師の教を垂れ玉はんことを願ふになん。

右家庭教育を重しとする類の答三分の二に及びたり。

（五）女に最とも大切とする所ろは、事に當つて人倫の輕重を能く辨まふること即はち德川綱吉公の御臺が、國の事夫の事に挾まれしと云ふやうなる時の覺悟なり。亦、事に當り死せんとする時にても、死して善きか死せずして善きかを能く分別して居ること。第三に身を潔白にして慾氣○風（字不分明）嫉妬の風なきことなり。

（六）女子は何れにしても一度は他に嫁ぐべき者にて、能く家事を計らい納め又よく人を愛し慈くしむ等、惣て一家の風俗は其妻の風俗に依るかと思はれます、又其如く一國の風俗にも關係するものゆへ、自分に教育なき時は、誠とに能く一家を修むることが出來ません。殊に女子は胎内に居る時より、既によく其子を教育せねば成ません。又其社會の狀態を能く知りて其子を教育し、風俗を改良せねばならぬものかと存じられます。それゆへ私は、教育學、家政學、社會學などを最も重んずべきものと思ひます。

（七）まだ具くは了知することが出來ませんが、私の思ひ升には女子はもと男子の伴侶として作られたるものにて、男子の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

みのすさまじき世を和らげて美はしくし足らざるを補なふべきものと存じます。織物にて言はゞ、女子の一生は緯、男子の一生は經でせう。それで女子は此曠漠たる淋しき所ろを調和し、ホームを作り、家内一切の事を管理し、子を敎へて後來の人傑を作り出すと尤とも大切なり。もとより家内の事のみを必らず爲せよと言ふにはあらねど、元來女子の天性は、外へ出で、働らく可きもので無いのですから、家内に居て天性を失なはず女子たるに大切なる事を爲た方が宜しからんと存じます、家を能く整のへ、樂しきパラダイスをつくり、家ほど好き所ろは無いと云ふて實に家を愛すると云ふ心を人々を出させたならば、社會へ出で一時人の目を驚かす如き事業を爲すより國の爲めに遙かに勝る所ろあり、即はち無名の英雄となるのであります、どうしてかと言へば、社會はもと一家の集まりて出來たものでありますから、先の如く家を愛すると云ふとが廣くなれば、即はち國を愛すると云ふとになります、左樣になれば願はないでも其國は強く且つ進歩して參ります、夫故へ天性を守り家に居て國の爲に盡すが宜しからんと存じ升。又た餘暇ありとも無くとも哀れなるもの丶爲に力を盡し、之を助けて遣るとは尤とも心を用ひて重んぜなければ成ません。いくらも女子に大切の事はありますが、中でも此等が尤とも大切で重んぜなければならんと存じますが、まだ十分には分りません。

（八）此事に付ては是非先生へ一度伺がひたく存じ居りしとに候。全躰初め學問するとに志しを起せしは、良妻とありて一家を整理し、不肖ながら樂しきホームの模範を造り出さんとの目的にて侍りし。左り乍ら其外に尙ほ一つの望みと云ふは、我身幼きより病者の傍にあり、又學校に參りて友達の病の床に侍べり、及ばぬ乍ら少しづゝ看護の事を爲すにつけ、つら〳〵考がへ候へば、抑そも女子の職として之にまさる樂しみやあると。今年の春惡しき風邪の流行せし頃、日記に記せし中にも、

げにや看護は尤とも我身に適する哉、此程脚の病氣の爲め苦しかりしも、人の看病し參らする程に名殘なく全快して今はいと心よし、身分と道理だに許さばかくて一生を送らまほしけれ、人の爲め上なき事業かな、かくて主

の賜をまたんと。

然し乍ら、此時の志しは、家を持ちて傍はら貧しき子供などの親もなく兄弟もなく養生するとの出來ざる人等を集めて看病するとか何かにあらねば父母は之をゆるすまじ（且つ我身には女子の獨立は餘りにほむ可らざるものあればと信じ居たればなり）と思ひ侍りし。然るに此頃家に歸り、よそながら父母に此事を語りしに云々。

（此外二十二人の答は、大抵右八の内の一に似たり。）

戀愛玄理

諺に蚤の夫婦と云ふとあり、妻大きやかなれば、夫はやさ形なるとを云ふ。少將は時致を愛せし如く、夫婦は兎角相異なれる所ろに愛を發す。こゝを以て、グラント、アルレンは、異質其電氣を發し、互ひに相引くとも云へり。然るに、日本の人の諺に、似たもの夫婦と云ふとあり、果して然らば、似たる者相愛するか、抑そも亦た相愛する者遂に似るに至るか。益し何れにかあらん。英語にライキ(Like)の字は、スクとも譯し、又似るとも訓す。愛好は似るの初めなるらん。

然るに、ヘルマン、フホル(Hermann Fol)てふ當世著名の胎生學者は、近頃ろ奇拔なる妙論を吐き、世を驚ろかしたり。

先生、去年ナイスの都に滯留せし折柄、名にし應ふ蜜乳月の好適地にて新婚夫婦が熱海、鎌倉とも申すべく、天下の新よめ新むこ、手を携さへて初婚始緣の樂しみに悠々なる土地なれば、森の下道、水涯の磯邊、兩々双々打笑みて散步するもの最ともくをびたゞしきを目擊す。

夫なき人は怨みやせん、年老いたる人は若やぎやすべし。左れど先生は冷々として學術的に觀察し、世の諺と迄なりにたる定說を飄然として覆がへし、夫婦は異質の人相合ふにあらず、似たるもの相結ぶなり、夫婦は終に至りて相似るにあらず、始に於て相似るなり、てふ眞理を直覺したり。

科學評論とも云ふべき、レビウ、サイエンチヒコの近號に、細かに其觀察を記載し、表を示して云へらく、

若夫婦百九十八組の内	似たるもの六割六分、六厘六毛
	似ざるもの三割三分、三厘三毛
老夫婦五十三組の内	似たるもの七割一分、七厘
	似ざるもの二割八分、三厘

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

斯の如く相似たり。始すでに似、終に至りていよ〳〵似るとを増す。然るに、不思儀なるは、相見ずして昔風に偶然相婚したる間柄は、其似ると極めて少なく、似たる割合大概二割に過ぎずとなり。即はち知る、擇び好みて婚するものは初めより似たるもの夫婦となる。

甚はだおかしきは醜男醜女の婚姻なり。其醜あるうちに、醜くさに一種の似たる所ろあり。先生之が解を下して云く、とは蓋し、當人平素鏡を見て己れの容色を知り、元來餘り結構にはあらねど、年來鏡の上の知己にて、不思儀と其貌を好き（たとひ好かざるとも之に慣れ）、遂に己が醜くさと相似たる醜くさをば、醜なりとせず、或は反つてタデの虫タデを好いて、其醜なる所ろを愛せしなるべし。到底又是れ、似るもの夫婦なりと。但し、先生未だ之にて足れりとせず、世間の學者に向つて一層此大眞理を研究せんことを促がしたり。ベルッ氏は其近著内科全書中、鼻の生理の部に於て云ふやう、

他人をば臭氣によりて好惡する人のあるとは事實なり。左れば、彼の戀ひ慕ふの念又は嫌やがり惡むなどの情の如きも、或は其人固有の臭氣如何によ る乎と。即はち、一說なり。

想夫行

雲峯子

其四

露のいのち消えはてしとも知らずして
たのむこゝろぞあはれなりける

月にうそぶき花にうたひ、　雲井の宮に住みにしは
内侍の君がやんごとなき、　際にて在ませし時なりけり、
窓うつ雨に袖をしぼり、　寄せては消ゆる岸の波に
世をかこちけるは憐れにも、　賤となりにし時なりけり
みだるゝ世とて君は今　亦旅びとに身をやつし、
かりねの夢をやむすぶらん、　置くつゆふかき草枕
袖はしめれど行く末を、　こゝろの内に樂みつ
こし路をさしてぞ立ち出で給ふ。
「石山寺のあきの月、　また見る時もあらざらん
比叡の高根をながめんも、　今日を限りとなるならん
都にかへり我世をば、　昔になしてのどかにも

暮さん時はあるやなしや、敵にうたれてうたかたの
泡とあるとも我夫に、遇ひ見ん時ぞあらまほし
あらしに遇はゞ我いのち、旅路のつゆと消ゆるとも
悲しからじと思ふらん、白帆みたるゝ鳰の海を
めてにながめつ濱村の、はま路づたひに行程に
何時か守山打ちこえて、比良の高根に近づきぬ
小松の里の小松原、朝風寒くちるつゆを
袖にうけても渡りゆく、河戸の川はきよけれど
末定めなく濁り行く、うき世のさまぞうたてきと
いかに悲しくおぼすらん、なげく涙にたどりゆく
道はわかねどいつしかに、東に見へし西濱も
西にながめてゆくうちに、こしの國へと入りにけり
たどりぐるしき九折、たつきも知らぬ山なれば
内侍はいたくつかれはて、「こしの國とは何處ぞや
左中將の在はする　城へは猶も遥けきや」と
やさしく問へば義政は「はや近くこそなりにけれ
いそぎ給へ」とはげましつ、深山の道をたどりゆく
谷ま〳〵に呼子鳥、友なつかしと呼ぶ聲に
山響のみぞ答へける、ゆく道すじにたきゝとる
山路の賤にことゝひつ、杣山さして行くほどに
敵人出でゝやらじとて、遮ぎる折もいと多し
こゝろのたけき義政は、仇をちらしつ山中の
草木分け行く追分も、とく過ぎぬればこしの國の
敦賀の津にとつきにけり、またも立ゆく旅の空
杣山をのみながめつゝ、思ひくれけり思ひきや
城にのぼりてことゝへば、左中將の公はいま
足羽にありと聞かんとは、「さればわらはも行かん」とて
内侍はまたも立ち給ふ、いづこ足羽と行くほどに
あまたのものゝふ靜かにも、歸るを見れば明らかに
敗れし軍と知られけり、先きなる一人義政と
内侍の君に目をとめて、手綱引きしめ駒止めぬ
鞍に打ふし云ひけるは、内侍の君に在はさずや
何處をさして行き給ふ」と、問へば義政云ひけらく
「足羽の城に公を訪ひ、遇はんとする」と答ふれば
ものゝふ忽ち駒を下り、双手をつきてひざまづき
流るゝ涙をおしぬぐひ、「昨日足羽の戰ひに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

藤島城に據る敵兵を　討たんものとて左中將は
あだをめざして打ちいでぬ、　折こそあしけれあだびとは
波のごとくに打よせぬ、　味方の人は少なきに
矢もつき弓もくだけけり、　雨より繁きあだの矢を
防がん楯もなかりけり、　詮方つきて諸共に
露ちる刃ぬきかざし、　むれ入る敵をなぎけるが
限りも知れず崩れ入り、　數いとしげくよせければ
刃もつひに折れにけり、　「打こそよけれせめよ」とて
天も轟きくろかねの、　地も裂くばかり大聲に
吶喊をつくりて打ちよする、　敵のいくさぞ凄じかりき
しのを亂して降る雨の、　そゝぐが如きあだの矢に
いかでか遂にたゆべけん、　味方は多く討たれけり
あまたの矢瘡に乘駒は、　倒れにければ左中將
赤も起たゝんとし給へり、　折りしもあれ悲しくも
白羽の矢の根眞向の、　眉間にこそはあたりけれ
のがれがたなき身の上と、　思ひ給ひけん左中將は
刃をぬきて首をはね、　遂にあへなくなり給へりと
云ひも終らずものゝふは、　流るゝ涙せきあへず

鎧の袖をぬらしけり、　きくより内侍は驚きて
魂も消えけんしばらくは　ものをも云はで伏沈む
やがてわれにとかへりしが、　築地のかげに倒れふし
聲を惜まず嘆きけり。
「あまたの月日まちわかし、　今日は遇なん明日や見んと
遠く訪ひ來しかひもなく　なきからにだに遇はずして
何處の空にかへるべき、　かへらん方もあらなくに
わらはも此世を逃れ去り、　へだつる世にてあき夫に
遇はん」と云ひつ取り出す、　刃をおさへものゝふは
内侍の心をなぐさめつ、　「今果て給ふはかひぞなき
末久しくもながらへて、　なき身となりし左中將の
ぼだいをとふこそ道なれと、　すゝむる言葉に是非もなく
つぼねは刃を納め給ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

すゑ樂しみてこしみちを、　またものゝふに伴はれ
内侍は都へ立かへり、　かよはん人のあと絶えし
さがのゝ奥に入り給ふ、　住む人もなき蓬生の
やどに淋しく暮し給ふ、　朝夕讀經に餘念なく

夫のあとをば弔らひて、
心の内こそあはれなれ、
なり行くはてをあはれとて、
理りとこそ知られけれ。
幾百年を過ぎたりけん、
詣づる人は絶えずとぞ、
昔をかけて匂ふらん、
昔のあとやのこるらん、
さゝぐる水と濺ぐらん、
人のあと訪ふ世の人の
こゝろのうちぞたのもしき。

たのみなき世をなげくらん
實に定めなき世のなかの
聞く人袖を絞りけるも
今も嵯峨野の墳墓に
手向けの花はゆかしくも
古き石碑苔むして
人の涙はなき魂に
御國の爲めに失せにける
こゝろの内ぞたのもしき

（終り）

●正誤　前頁九號局とあるは內侍と正す、仝下段一行月かげもは月かげはと、仝二行高れもは高れにと正す。

○具氏の宗教

グラッドストーン氏、近頃ろセント、マーチンス、レーンなる共同書籍館にて、演說すらく、此書籍館に類するさまぐの制度が、以て能く十分に人を完全にすと云ふと能はず、もしかゝる希望を有せば大いなる誤まりなり、眞との慈善もたゞ人の心の發するまゝにしては其十分なる所ろに達すると能はず。宗教――基督教未だ世に出でざる限りは、眞誠完全の慈善行はるゝとあらず。

開書

金森通倫君に與ふ

在遠江袋井　山路彌吉

金森君足下　足下の名は昔より聞けり、而して今敢て公簡を呈する所以の者は我宗教世界の近事、實に慨歎に堪へざるものあればなり」足下が決然として番町教會を去るや可なり、而れども足下が余は色ある教會に加はらず單身基督教の爲めに働かんと云ふに至ては其意氣實に慨然たるものありと雖、僕は更に足下の反省を乞はざるを得ず」足下試に思へ古來身を正統教會の外に挺し、而して能く精神界に爲すことありし者果して幾人ぞ、クレメントなりチリヂエンなりグレゴリなり將た博士アルーなり博士チヤンニングなり彼等固より一世の傑なりと雖其功寧ろ消極的にありて積極的にあらず深邃の理論を以て卓犖の識を以て包略の才を以て一世を震撼せしとは之有り焉、正統教會の腐敗を警醒し僻見を匡正せし迹は之有り焉、而も未だ嘗て能く精神界に新智識を加へ新動機を與へたるとを聞かざるなり、足下が此の昏睡せる委靡せる「エナルジイ」を失ひたる活動力を失ひたる今日の基督教會の耳邊に獅子吼を爲さんとするの勇氣は僕實に之を感ず、而も日本今日の心靈界に要する所のものは建設的の事業なりとせば僕は更に足下の正統教會に還らんとを請はざるを得ず」試に問はん足下が所謂教理上の異論なるものは抑も何の點に在る乎僕嘗て謂らく信仰は事實なり神學は假定なりトレミイ氏の天動說倒るゝとも之が爲めに日月は其光を減ぜざる如く幾多の神學興りては復亡ぶるとも基督教徒が第一紀の始より有せし活潑々の信仰は決して增減すべきものにあらざるなりと足下が所謂教理上の異論なるものは、よもやパウロの信ずる處、ペテロの信ずる處、ヨハ子の信ずる處、即ち正統教會が信ずる所を疑ふの謂にはあらざるべし、パウロを以てヨハ子を以て、ペテロを以て愚痴迷溺の輩となすの謂にはあらざるべし、且僕は足下が謙虚の士、實行の士なるを知る、一時の感情に激せられて、若くは朝暮に變ずるか如き薄弱なる人智を賴んで天啓の教を疑ふが如き輩に非ることを知る、思ふに足下の所謂異論なる者は必らず深く根ざす所あり、詳に思ふ所あり、容易に動かし難きものあるならん、僕實に之を聞くを得ざるを怨む、但大凡宗教上の認識なるものは三分は推論にあり、七分は經驗に在り、足下日々祈を以て起ち、祈を以て寢ぬる乎、日々神と交親して其直接の靈化を被る乎、日々キリストを朋とする乎、足下の斯くの如くなるを信ず、果して然らば余は亦經驗が足下に正統教理の眞理なるを證して餘りあるを信ぜんと欲す足下僕は謂へり日本精神の

界が今決すべき問題は只に一言して足れり曰く光明ある國人となるべきや否是のみ、紛々たる異論麻の如し、而も僕は一言して之を斷ぜん、曰く術も自然以上の生命あるとを信ぜざるの宗教は皆光明なきの宗教なりと、余は何人の前にも斯く抗論せんと欲す、蓋し自然以上の源因を基督教より除かんとす、是其精を奪ふて皮を存せんと欲する者耳、僕は斯る拙策を行ふよりも寧ろ龍倫の大哲學者が爲せし如く獨創の倫理哲學を以て猶太の木匠に代らんと謀ることそ男兒らしき事業なれと思ふ、而れども記せよ、人智は如何に進むも天に達するのバベル塔は決して築くと能はざるなり、默示なき人造の宗教は環の週りて端なきが如く同一の謎語を百回千回繰代すもの耳、余は信ず「ユニテリアン」と雖も「ユーニバサリストス」と雖もスピンチル先生に因りて我國に代表せらるゝ高等批評派と雖も、彼等終に同一の運命に歸すべき耳、即ち先命なきが故に冷淡に陥り冷淡なるが故に怪訝に陥るべき耳、足下の賢なる必らず之を知らん、足下の明必らず我國の天下萬國と均しく靈界の光命を要することを知らん、果して然らば足下終に正當教會に返らざるべからざるなり」蓋し今日に於て正統教會ならざる教派が猶其殘端を保ちつゝある所以の者は他なし、正統教會と境を接すればなり、余各地傳道の景况を察するに槪子如此し、然る所以の者は何ぞや、他なし彼等の爲す所、多く消極的なればなり彼等の天職は正統教會の腐敗癖見を匡正するに在ればなり、故に若し攻擊すべきの正統教會なき所には彼等は自ら樹つ能はざるなり」足下僕は幾回も繰返して曰はんとす、吾人は今如何なる地位に立つゝある乎、日本は今如何なる境隅に圍まれつゝある乎、我愛敬する足下よ、何ぞ君の前后左右を顧みずして、徒らに神學上の空論に心を勞して役にも立ぬ教會爭論史を再演せんとするか、日本の人民は皆福音に飢つゝあり、日本の何處にも新信條、新道德の必要を示さゞるはなし。吾人は決して優々として机上に三位論若くは一位論、證據論、インスピレーション論等を爲して此一刻千金の時間を空過すべからざるなり、事を爲す多言に非ず、力行如何と顧るべき耳、議論多くして實少きは是れ實に東洋政治家の弊なるが如く亦東洋宗教家の弊なり吾人は實に之を慨す。足下よキリストは果して日本現時の教師諸君の或者の如く議論家なりしや、彼が三年の事業は果して神學上の解釋なりしか、僕は其然らざるを見る、彼は其天職を行へり、彼は此世に天の國を立ることを以て一生の目的となせり、此目的の爲めに勞せり、此目的の爲めに死せり。彼は固より議論を爲せり、然れども之を爲すや彼等の如く哲學者らしからずして天の靈化を蒙りし恩寵の語を以て爲せり、僕は我先輩の彼の迹を躡まんとを望む紛々たる小異同を爭ふて百年の六計を忘るゝ者は僕の與せざる所なり」古人曰く仁に當りては師に讓らずと僕今名と住所とを公署して敢て足下に質すこと此如し、足下若し僕の言を不可とせば僕請ふ旗鼓筆硯の間に相見へん必しも逃避せざるなり不宣。

小説

マイルス、スタンヂツシユの戀

第四回　ジョン、アルデン（下）

愛山逸民

斯く言ひて彼は強き決意の中に、海岸を後にして黄昏の中をいそぎ還れり、寂然として陰氣なることと殆ど彼の心の黯澹なると相似たる森林を過れば黄昏の模糊たると霧深きとの間より七の星の輝く如くプリマウスの七の家の燈光は見ぬ家に入れば恐ろしき尉官は獨坐してシーザルの戰記に心を奪れつゝ、今ハノーブラバンフランダースなどにも大戰を爲しつゝある樣なり。尉官は答を待かね、其結果をば氣遣はざるものゝ如く嬉々たる態度にて御身の使が長かりけることよ、森を隔つるとも遠くもあらぬ家なるに御身は長く彷徨しよ、御身が行きて還るまでに余は十の戰を戰へり、一の都府を攻落せり、來れ坐して次第に有りしとどもを話せと。

ジョン、アルデンは物語れり、始より終まで細に有のまゝに驚くべき冒險につきて物語れり、プリスキラに遇ひしとより、彼女

に尉官の意中を話せしとを物語れり、但彼女の拒絶せしとをば少しく和げて話しぬ、されども彼が終にプリスキラがジヨン何故に御身は御身の爲めに語り給はぬにやといへりし可憐にして而も尉官に對しては極て殘酷なる言語に話及びしときプリマウスの尉官は躍上りて彼の武具が其懸ありし所にて不吉の徴候とも思はるゝ計の音して壁にひゞきし程に床を踏ならしぬ、一たび破裂せば四周の物を粉塵にする爆彈の如く其鬱屈せし憤怒は爆然として迸出せり、荒々しく高聲に彼は叫べり"ジヨン、アルデンよ御身は余を賣れり、余、御身の朋友マイルス、スタンヂツシユをば傾覆せり、欺騙せり、賣了せり、我祖先の一人は其劍を以てワツト、タイラルの心臟を貫ぬけり、誰か余が余の劍を以て反賊の心臟を貫くとを禁ずる者ぞ、御身の反逆は更に太甚しきものなり、何となれば御身は友誼に對する反逆を爲たればなり、御身は余の屋下に生活せり、余は御身を兄弟の如く撫育せり、愛憐せり、御身は余が案上にて食へり、余が杯にて飲めり、余は御身に余が名譽、最も神聖にして最も秘密なる余の意中をば明して委托せり御身も亦ブルータスよア、爾後友誼の名は禍なる矣、ブルタスはシーザルの朋友なり、御身は余の朋友なり、而れども爾今我等の間には戰及び和し難き怨憎の外何者もあらざらしめよと。"

プリマウスの尉官は斯く語りながら憤怒を以て激昂しつゝ室中を歩めり、其鬢邊の血管は繩の如く見へぬ、然るに彼の怒の央ばに一人ありて戸口に顯れ要急の使命を將來せり。是ぞ危難戰爭印度人侵入の風聞なりけり、尉官は直ちに立止れり、更に答も談話をもなすことなく壁の釘より其劍と鐵鎖とを取腰の周に革帶を締め恐ろしげに蹙額しつゝ出去りしかば、アルデンのみ獨り殘されけり、鞘のひゞきは距離の増に從ひて次第におぼろげになり終に聞へず、アルデンは其坐を立ち黒暗をば眺めやるに冷かなる風は凌辱の爲に熱くせられし頬をば吹けり、彼は目を擧げて天を仰ぎ小兒の如く其手を組合せ夜の靜かなるところにて隱れたるに見玉ふ父に祈りけり。

須臾にして怒氣を帶びし尉官は民委會まで恐々の裏に歩み着しに人々は既に集會して切に彼の來るを待つゝありし、彼等は皆壯年にして其態度は盡く嚴肅なり、其中に天を磨る高山の雪を以て被るゝも猶屹然たるが如くなる唯一個の老人あり

是ぞプリマウスの尊き長老なりけり。蓋神は此に麥を種んとて（純然たる信徒を指すに麥を以てす）三國（英、蘇、蘭か猶考可）を篩ひ終に一國民を造るべき生たる麥の種を篩ひ玉へりとは古傳の云ふ所にして亦此人民の信仰せし所なり。而して彼等に邇く嚴重にして輕慢なる姿勢して一個の印度人ぞ立けり、其腰より下は裸躰にして容貌は獰猛あり、彼等の前には机ありて其上に開れざる聖書が載せつゝあり、此聖書はいと重げにて革もて包み黄銅の飾釘ある者にて和蘭にて印行せし者あり、其傍らに輝く響尾蛇の皮ありて箙の如く箭を以て充されぬ、是戰爭の記標挑撥にして印度人の將來りし挑戰の烈しき舌もて話す者なり、マイルス、スタンヂッシュが室中に入しときは恰も彼等が此敵の使命脅嚇には如何なる答が適當せると、議論しつゝある時なりし、或は斯の事を話す者あり、或は彼の事を話す者あり、計圖するもの、擬議する者、拒絶する者いと種々あれども平和を呼ぶ聲は唯長老のみなり、彼は何人の殺さるゝよりもたとひ僅かにても悔改するもの有る樣にすることこそ賢こく且善きとにして是ぞ「キリスチヤン」の所行と云ふべけれと謂へり、此時勇猛なる尉官は其喉を鳴しながら語り出せり是彼の聲は憤怒を以て勵くされてありしが故なり、何と、御身は乳汁と薔薇水とを以て戰爭を爲さんと謂へる乎、御身が會堂の屋上に御身の忽微砲を据置しは赤き栗鼠を射んが爲なる乎、或は赤き魔神（印度人を指す）を射んが爲なるか、信に野蠻人の理解し得べき唯一の舌は大砲の口より話す火の舌ならざるを得とプリマウスの尊き長老は此不遜なる言語に驚かされてか答て言り聖パウルも他の使徒等も若考へざりし、彼等が語るに用し火の舌は大砲の口より來る者にあらざりしと然れども此温和なる警戒に尉官は少しも心を止めず机の方に進み行きて、猶其議論を續けたり。余に此事を委ね玉へ、是余が權利に屬するとなればなり、戰は恐るべき事務なり、さりながら、其理由だに正しからば彈藥の臭は芳しきものあり、斯くして余は挑戰に答へんかなと。

斯くして彼は遽かに輕蔑せる態度を以て響尾蛇の皮より印度人の箭を引ぬき彈藥と彈丸とを蛇の顎中に充つるまで皮中に入れ野蠻人に返し渡し雷の如き調子にて言けるは來りて之を取れ、是爾への答ありと時に蛇皮を負ひ其身までが蛇の如く見へて輝くところの野蠻人は靜かに戸外にすべり出で暗中に屈曲せる道の上を森林の深みに向ふて歩み行きぬ。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

紫海の嵐

みさを

第五回

空は朝まだきよりくもり、折々降りくる時雨、はれみ、はれずみ定めなし、今日は如何なれば臼杵の城内常にもなく騒がしかるらん、往く人返る人、馬上より號令するもの、荷物を舁ぐ者動よめくさまなり、所々にむれ集ふ武士、甲冑こそ着けね、或は槍を持ち、或は弓矢を提へ、大小いかめしく脇ざすあり、陣笠陣羽織を着けたるあり、集れる人の左程多からねば戰ひとも見えず、訝かしき事の限なり。

親虎は人目を忍びて去る夜中竊かに城を出で、親家に遇ひ、身の上に積りける憂苦を語り、時の過ぐるも知らざりけり、親家そを聞きて同情の心止みがたく、深く憐察するの心を述べ、主にありて兄弟となり、生死苦樂を共にせんと固く誓へり、惜しき時の過るは疾し、怨めしき鳥のなく音に東雲の近づきしを知り、再會を期して分れけり、まだ夜は暗きに、兩人手を分つて幾度か顧りみ、捨て難き心になつかしき友を思ひつゝいけたり。

閑居する茅屋に歸りて其夜親虎は床に入りしが假醒む間もなく夜明けぬ、例の如く起き上りて聖經を讀み、神に祈る、午前八時と思しき頃二人の武士親虎の庵に入り來りぬ。何れも身の丈け高く力强げなり、そが一人は顔長く目尻上り、愛相に乏しげなり、太き髭、直ぐなる躰度、一見して其意地あしきを知るべし、双手を袂に張り、袖を後ろにかへし、優々と坐に直る、他の一人は容貌温和にして直實の心面に溢る、先きなるは奸佞にして後なるは忠誠なるべきか、劇場に比せんか、彼は岩代にして是は駒澤なるべし。

嚴然として上坐に控ゆるは一見城主義親なるを知るべし、側らに大小を横たへ、左手袴下にあり、右手もて扇を膝に立て、遙かに末坐をながめ、今頭を疊に俯して禮をなせる二人の武士に問ふ様「返事の次第如何に、疾く語れ」と云ふにぞ、一人の奸惡なるもの答ふらく「所詮若君の御心改まるべくも見えず、まだ主君が迫め給ふ事の足らぬが故なり、君聞き給はずや、古來宗敎家なるものは命を致してだに信仰を全ふすと、況して幽居程のこと何かは侍らん、若君の御心變らせ給はぬも理りとこそ知られけれ」と毒舌惡口害を爲して揚々たり、傍なる武士聞きかねて「主君に申すことあり、若君の御心を察

し奉るに信仰遂に動くべくもあらず、之を妨げ給はんは天に對して恐れあり、疾く若君の閉居を免し、其御心に任せ給へ」と云ふ、城主大ひに怒り「默せよ、汝の云ふ所非なり、今免さんは虎を藪に放ち、鳥を空に行るに異ならず、不孝の子愈不孝となり、悪人愈悪を爲さん、汝亦云ふ勿れ」と叱責せり、忠直なる臣は不明の主に容れられず、忠言は良藥より苦きは人情常に然り、然も義親愈親虎を苦しめんとす、奸臣亦機に乘じ「今にして免し給はんは不可なり」抔云へば義親は忽ち打ち笑み「然なり、汝の云ふ如し」と云ふ、忠臣の赤心避られ、悪人の諛辭容易に聞かる、誰か爲めにかざ泣らんや。

忠臣度々諫むれども聞かず、義親は奸臣を傍らに呼び、今後の策を問ふ、如何に答へ如何に開くらん、互に耳語して時に笑ふのみ、忠臣一人坐を退ひて義に泣く事甚し、同じ主君に事へ、等しく祿を食むの臣にして黒白相反する事斯の如し、而して悪人奸者日に勢を得、臼杵城主の一家、其行末は如何なるべき。

はや十時頃となりぬ、數十人の武士行列を整へ、威儀正々臼杵の城門を出で、行列の中央に二個の籠を舁き行く、一は親虎の乘れるなり、一は之を護送する家老ならん、不時に武士を集め、城中騒がしかりしは親虎を護送せしめん爲なりし事今にして知らる、或は幽居せしめ、或は人と交はりを絶たしめ、而して尚飽かず、親虎を何處にか送らんとすらん、如何なれば斯く殘虐に遇するか。

嘗て親虎を茅屋に居らしめ、はや久しき月日も過ぎしかば信仰も薄らぎしならんと思ひ、義親は今朝しも二人の武士に命じ、親虎の心を問はしめけり、豈圖らんや、爾來益心を固くして親虎は一日も速く傳教師より洗禮を受け、信徒たるの名を顯はさんと決心なせしとは、義親は之を聞くだに心痛ましく、且つ腹立たしきに、傍らより悪意を沿へ、讒言を加へければ恰かも火中に薪を投じたるが如く心愈怒れるに、奸臣策を呈せしかば喜びて之を採用し、さては親虎城外に遠ざけらるゝ事とはなれり、されど眞理は尚消え難き猛火の如く、一方に防げば他に發し、一時靜まるとすれば亦久しからずして更らに大勢力を以て噴出す、愈壓すれば愈烈しくなるを如何せん、義親利欲の爲めに此眞理に抗す、豈壓し得る事あらんや。

此處は豊前の國にて、大友の領地山多く谷深き僻地なり、遠き峯や近き谷に折々煙の立は人の住所ならで、山賤が炭燒く所なるべし、折々人の聲するは遠き里より薪とりにと來る者ならん、淋しき谷間に柴の庵を結びて住ふは何處の誰にやあらん、山水を樂しみ、風月に心を寄せんとならば斯くまで世に遠ざかる必要もなかる可し、世を忍ぶとならば更らに深山の奥やよかるべきに。

臼杵の城主が其子親虎を送りて住ましむるは此處なり、嘗て城中にて囚人の如く一室に閉ぢ込めしもかひなくして愈信仰の心強きを加ふるにより、如何にせんと義親窃かに思慮せし折しも此上は遠き僻地に置き全く改悔するの時を待つに如かずと云へる臣下あり、之に從ひしものなり、今や親虎は臼杵の城を離る數十里の地にあり、人の訪ふなく、音信を通す能はず、只一人の臣の侍するあるのみ、されど其心は變はらず、否更らに決心の固くなれるが如く、他日上帝の加護により自由の身とならんには直ちに傳教師に就て洗禮を乞はんとするに至れり、磐石の上に立てられたる城の固きがごとく動かぬ人とは親虎の如きを云ふならん。

家政

朝日屋

山下石翁

府下百萬の家々いらかを列べ打ながむる處ろ城の如し。特に目鏡橋より日本橋に至る間だは、左右構へたくましく、軒高く、あつぱれ日本づくりの大店全國第一のものと見ゆ。中に、聳然として一層高く、巍乎としてあたりを拂ふ洋館は、朝日屋と云へる舶來雜貨店なりけり。

店のけしきかゞやき渡り、たとへば鏡を四方に掛けたらんが如し。然るに、之に映るは、尋常に坐りたる數人の番頭丁稚のみにて、客足の之に近づきしを見しと稀なり。朝日出で、屋の尖塔を照らし、夕日入りて店の土ぶ板に映ずる頃まで、小僧は坐禪の如くすわりつめ、番頭は帳面を開かんともせず、たゞ街上をにらむのみ。眠氣さすのみ。折々はうなづくのみ。

やつがれ、此前を通るたび〱、嗟歎して獨り言ちぬ。あゝ、あゝ、格外の大構へをしつらへ、時世に合はぬ西洋のまねして、たとひ家を大きくすとも、品の賣れざるを何如にせん、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

號して朝日屋と云ふとも、商ないなくば、遂に落日の不運なからずや。之だから、若いものは困る。とかく、西洋のまねをして、貿易とか交換とか言へど、たしかなるは、矢張り天保商人に若かず。あゝ、あゝ、此家も遠からずして閉店するならんと。

數年前かく思ひぬ。通るたび見る度毎にかく思ひぬ。然るに客足の無きにかゝわらず、店は依然として元の如し、商の無きに、構は嚴然として常に異ならず、否な、年々近邊に一つ宛出店を出し、今は第三第四の朝日屋あり。見上たる處ろ、階上の普請追々に美しうなり、飾り年々に加わる。家の景色何となう福々しう、貧相の氣かつて上らず。何處より見るも、竈はにぎわひけりと詠まずんばあらず。

聞く所ろによれば、主人は佛蘭西にあり。彼地より物品を此方に輸たし、田舍に多く得意をもちて、旨と大卸しを爲すよし。時々歸朝したるときの樣を見れば、馬車に乗りて驅けあるくともあれど、身のまわり至つて質素、紋付の羽織昔しにかわらず、言葉つき斷えてなまめかず、折々は鍬を取つて、土ぶ板の普請を爲す折もあり。其子某武道をたしみ、暇ま々々劍術を學ぶ、心得凡ならず。左れど、自から車を引いて、得意に品物を送るともあり。家風總じて質朴、中々に神田第一の大家に似ず。

經濟の立て方は、豫算を固くし、決算を明らかにし、利益金の分割配當を嚴にして、若干は普請用、若干は分配、若干は貯金と云へる如く、夫々分度に隨ひて割付く。かくて、普請の料積もり、彼の大構へとなりぬ。一たん、彼の大構を建て、先づ店は美しく飾りたれど、二階三階は其まゝにて壁だにつけず、年々もうけの擧り、普請用の集る迄は、其まゝにしたり。一家むつみ、使はるゝもの樂しむ。器量あるものは、分店の長となさる。年々金をうみ、店をうみ、隨つて利益をうみ、朝日屋の身代、その名に恥ぢずと云ふ。

實際をきゝて、やつがれもほと／＼感じ、左樣、經濟は然あらざる可らずと言へり。金を積むは、穀を作るが如し、種を撰み、季節を考へ、肥しを好くし、收納をあやまたず、正直に、勤勉に、忍耐にして、初めて天の報ひを得。一粒より直ちに万粒を取らんとし、瓜の種より茄子を取らんとするは、出來がたきと勿論なり。

時事

陛下還御奉迎

陛下、一臣民が狂妄の行ひに御心を惱ませ玉ひ、善鄰修交の仁によりて、遙々西下あらせられ、夜も御眼とを合せ玉はず、神洲の運と四千万蒼生が命とを、一身に掛けさせられ、十一日此の方片時も御心を休ませ玉ふとなし。今ま、露公子の出發により還御あらせ玉ふ。社員、新橋停車場のほとりに、奉迎して、涙せきあへず、襟の沾ほふに何となく恥かしく、又恐み伏して、感謝し奉つりぬ。

○國民一心

兄弟墻に爭ふは今時の事にあらず、當に同心一和して斷々乎道を踏むべき也。吾人が祖先此の日東の地に生れ出で、二千五百年間此に住へり、吾等が此地を守護するは天の命なり、地を守護するは、眞理を看守するに均し、家こゝに存す、政府こゝに存す、帝室こゝに存す。其一寸の地を傷つくるは五躰の一部を害なふに均し。

○正義眞勇

省みて疚しからずば、千万人と雖ども吾往かん。僞はりと邪しまとは、眞勇の宿地にあらざる也。人もし、勇ならんとを欲せば、先づ正しかるべし。國民の強健も亦た之に同じ。吾等は、人情に鑒み、天道に訴たへ、至當の事を爲すべし。其以上一毫一絲も讓るとある可らず。

○渾發的慷慨

號叫烈發、沸々沫を吐く、而して之を試むるに多少の味はひあり。輕士の慷慨之に似たり。如此き慷慨をラムネの慷慨と云ふ。達鑒遠識なくして暴に悲憤するは頗ぶる危ふし。如此き人は、飛出す前に少しく沈思するを要す、暫らくせば情冷へ心落付くなり。古來名法あり、肝癪を起す前に、イロハを一通り誦せよと。今日はエ、ビー、シーにても宜し。

○新聞紙

日本の新聞紙は日本人の心に似たり、一事件出來すれば只だ其事のみを言ひ、万事を忘る、万事を忘るゝほどに熱心なるは可なり、左れど熱心の續かざるを何如んせん。新聞紙先づ此弊を改たむるとを主とすべし、斷じて之に乘ず可からず。今や大使發す、今后の談判は暫らく之に任すべし。宜しくば

國民手を擧て贊し、宜しからずば悉とく反對し、行ふべきは一和して行ひ、調のふときは合して祝すべし。其外に道なし。今や他に幾多の爲すべきとあり、人よ、起て、みな其持場々々の仕事にかへるべし。

○東京商業會議所

其選擧は意外の競爭にて、驚ろくべき猾手段行われたるが、先々當然らしき人撰擧せられたり。經濟記者、其猾手段の一二を目擊せしとて記して曰く、其一方は必勝の人又は必敗の人と選擧用紙を交換して、自己と併び立つものゝ票數を減ぜんとしたる事。其二方は、約束上互ひに某をと撰擧し、後に其名を改めたる事。其三方は、撰擧用紙を僞造したる事と。天保時代禿頭親爺迄で、浮きたる名聞を貪ぼり、所云る石町正直商人の氣風追々に滅す。

○會計檢査官

遞信省の怪聞しきりなり。會計檢査官は嚴刻に取調べ、天下に事實の有無を明告すべし。然らずば、明治政府の信用も、會計檢査院の信用も、同時に地に落つべし。

批評

○家庭教育歷史讀本　　蕪　象　子

博文堂より第二編を出版す。如意輪堂、泉岳寺の二つにて、落合直文、小中村義象の二君之を著はす。事實は世の普ねく知れる外に珍らしきとなし、文章は泉岳寺の方優れたり、蓋し落合氏の筆なめり。二篇ともに我國の譽れを書きたるなれど、たゞ敵打と云ふとを主として案を立てられたるは、面白からず。常時保守熱しきりにして、何となく昔がへりせし心地す、近頃のさわぎの如き亦た其の一徵候ならん。左るを、家庭の讀物として少年に味はすに、たゞ敵打を目途とするは、極めて危ふし。二氏の妙筆を以てして、更に書きようのあるべかりしものを。

○海外女學

(1) "*French Cookery for Ladies*" by a Cordon Blew (Madame Emilie Lebour-Fanssett). (T.S. Virtue & Co.)

(2) "Illustrated Lectures on Nursing and Hygine." By R. Lanton Roberts, (H.K. Lewis).

(3) "The Secret of the Princess," by Mrs. Sutherland Edwards. 2 vols. (Chapman and Hall).

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女報

可愛子編

●露國皇太子御遭難に付ての女報

●皇后陛下　一たび露國皇太子御遭難の報に接せらるゝや、皇后陛下は、主上の御心を酌ませられ、御涙を押へて、主上を慰め奉り、十二日の朝、主上御發輦の折は、新橋停車塲まで御送りあらせられたりと。

●皇太后陛下　には杉皇后宮太夫を御奉送御使として、去る十二日新橋停車塲へ差遣はされたり。

●皇后陛下の御見舞　皇后陛下には、去る十二日朝七時、京都なる殿下御旅館へ向け、御見舞狀を差出されしと云ふ。

●皇后陛下の御憂慮　天皇陛下御發輦後、皇后陛下には西都の御摸樣に御心を惱まさせ給ふこと一層切にして、御潸涙に御裳を濡させられ給ひしと承る、且つ露國皇太子殿下御遭難の日より、一時間毎に御手づから電文を認めさせられ、露國へ宛て同國皇后陛下へ殿下の御病狀を御知らせ遊ばされし由、然るに去る十三日同國皇后陛下より御禮報を送電遊ばされたる由。

●青木令孃凶變に泣く　青木大臣の令孃は、夜となく日となく、露公使館を訪問し、公使夫人も最も之れを寵愛する由なるが、今回の警報逹するや孃は直に全館を訪問し、我父は日本人母は獨逸人、條約云々の事に付ても心配せしに、何ぞ圖らん斯る凶變のあるべしとは、父の國は實に失敗を取りたりと、潸然として涙を下せりと。

●貴夫人の參內　日本赤十字社の篤志看護婦人會員の各親王妃殿下を始め、其他貴婦人は、去る十二日午前より宮中へ參內し、皇后陛下に謁し、露國皇太子殿下御遭難に付き、御治療法等に關するの儀を申上げ參らせしに、陛下にも種々御下問等遊ばされしと承る。

●皇后陛下の御心痛　皇后陛下には今回の事非常に御痛心あらせられ、日々宮中に配逹する橫文新文三種（ガゼツト、メール、ヘラルド）の記事中、同皇太子御負傷に關する記事は、細大となく之を譯して差出すべき旨を香川太夫へ仰せられしに付、外事課飜譯掛にては日々右記事を譯し上覽に供へ奉りし由承る。

●小松宮妃殿下　は十二日の終列車にて京都へ赴き、十五日午後一時三十五分神戶に至り、露國皇太子を御訪問遊ばされ、日本皇后陛下よりの合旨を傳へられたり。

●皇后陛下よりの賜饌　去る十六日、皇后陛下より厚き御思召を以て、各大臣樞密顧問官へ非常に見事ふる御料理を下し給はり、「此度の事變に付卿等の苦慮を察するに餘あり卿が其勞を慰せんが爲に」との御詞を添へさせられたりと承はる。

●小松宮御息內參所　には去る十六日午後十一時五十分、新橋着終列車にて御歸京あり、十七日午前十時より、宮內省へ參內被遊たり。

●露國公使館　へは皇太子殿下御遭難後、訪問者引も切らず、また宮中女官方よりは各々懇篤なる慰問の書狀を送り越せりと。

●露國公使夫人の苦慮　同夫人は去る十二日朝より政舘にありて敢て一歩も動かず、來客をも謝絕されたり。

●露國公使夫人の齋戒　同夫人は、十二日午後二時中より齋戒し、皇太子の爲に祈禱をなされし由。

●露國公使館の令孃泣く　去る十一日露國公使館へ皇太子殿下の凶報逹するや、露國公使の令孃の驚愕一と方ならず、公使が御付添ひ申しながら、箇樣のこと有りては本國政府に相濟ぬことなりとて、座敷の內に泣き倒れ人事も辨へぬ程にて有りしと。

●露國公使夫人神戶に行く　露國公使の夫人は、去る十四日午後九時五十分、新橋發の汽車にて神戶へ向け出發したり。

●露國公使乘込みの汽車轉覆せり　されど御怪我なかりしとは幸なり。

●露國公使夫人　は去る十六日、小松宮御息所と御同車にて、神戶に着され、露太子を御召艦に訪問されたり。

●松方伯爵夫人と露公使夫人　松方伯爵夫人は、去る十六日露國公使の夫人を訪問したるに、公使の夫人は、太子殿下が鹿兒島にての歡迎の御滿足のとなど物語られたりと漏れ聞く。

●露國領事夫人の神戶行　橫濱駐在露國領事の夫人は、皇太子殿下の御見舞として、去る十五日神戶へ赴きし由。

●華族女學校の休業　同校にては露國太子の凶變に付き、去る十二、十三の兩日休業せり。

●華族女學校の見舞　同校にては、西村校長を職員學生の總代として去る十三日京都へ派遣したり、十五日、西村氏は神戶に於て、御見舞狀に、御椅褥五枚、御膝掛一枚添捧呈せり。

●女子高等師範學校　にては電報を以御見舞申上げたり。

●明治女學校　にては去る十一日の夜殿下遭難の飛報來るや、一同熱涙を揮て、上帝に祈禱せりといふ。

●基督教有志相談會　は去る十三日、明治女學校內に開き、總代を撰擧して、ニコライ主教を訪ひ、此度の不幸を見舞ひ、且つ此變の爲め二國將來の交誼を傷けざらんことを談議したりといふ。

●老婆の祈願　此度の兇變あるや、名もなき一老婆、露太子殿下の爲めに、御平癒を祈り、每朝某神社へ參詣致したり。

●令夫人の祈願　永田町邊の去るやんごとなき方の令閨には、夫の方の西京に赴かれし留守中も、一心に山王氷川の二神社へ朝夕歩を運び、一ヶ年間の茶斷さへなされたり、然るに殿下の御入京御見合せとありしを聞くや、落膽一と方ならず、病むともなく枕に就かせけるとなん。

●露國皇后陛下には御病後の事なりしに、今回皇太子の變に付ては、如何ばかり御心を惱まし給ひけん、曾て太子御出立の砌も頻りに止めさせ給ひし程なれば、太子の治療は軍艦にてなせとの電報を發し給ひ、又皇帝陛下に願ひ奉りて、太子の御歸國を促がし給ひしならんといふ。

●婦人大祈禱會　廿八日午后三時本郷中央會堂にて。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●明治女學校　の教員職員生徒一同は、去る廿二日天皇陛下の御還幸を奉迎す。〇以上はたゞ吾等が知れる所を記せしのみ、人知れず泣きたる者は幾人ぞ。

●皇太后陛下の仁慈　今般南豊島郡御料地内に、新築の日本赤十字社病院落成に付、去る十一日畏くも、皇太后陛下には行啓の榮を賜はり、皇后陛下にも香川皇后宮大夫及び紅梅典侍を御代覽さして差下されたるが、此日皇太后陛下には金五百圓御下賜あり、尙入院患者四十三名へ各一圓宛を賜はり、何れも仁恩に感泣して拜受したりと云ふ。

●又同日の參院者は　各御息所殿下、陸軍々醫總監、篤志婦人會員等六十餘名。

●彰仁親王妃殿下賴子殿　は京都へ御旅行として、去る十二日出發せられたり。

●女子高等師範學校附屬小學校　にては去る十二日、同校へ各生徒の父母後見人等を呼び集めて、學校に於ての教育の仕方を話し、各生徒等が各自の家にある時には、如何なる習癖ありや等を尋ね、務めて學校と家庭とをして程能く結び付け、教育の實効を擧げんとせりと。

●香蘭女學校進級證書授與式　麻布永坂町なる香蘭女學校にては、去る十四日、學生進級證書授與式ありたり、

●東京女學舘の學術演說　虎ノ門內東京女學舘にては、自今時々大學の諸教授に依賴し、簡易なる學術演說をなし、生徒の傍聽に供する筈にて、その手初として去る十九日午前十時半より、櫻井理科大學教授が化學上の講義を爲し、實例を引き解釋をなしたる由。

●個人的廢娼同盟會の訴訟提起　同會にては娼妓の依托に應じ、廢業の事或は樓主への談判等に關する訴訟を提起し、斯くて廢娼の目的を遂せんとするものゝ由なるが、同會にては此度東京新組台代言人小林政一氏を代人となし、不日娼妓廢業故障解除の訴訟を起す事に決せし趣なり、尤も小林氏は此事たる全國貸座敷營業者の興敗に關する次第なれば、容易に承諾の挨拶を爲さず、目下は單に取調中なりと。

●橫濱共立女學校同窓會　橫濱山手二百十二番共立女學校に於ては、同校出身の婦女と、現今同校の卒業生、學生相集りて同窓會てふものを設立し、去る九日、同校內に於て、其開會式を擧行し、同時に二十年該校にありて勤勞せられし諸教師の慰勞と、新たに渡來せられし教師の歡迎會をも兼て開かれたり、來會者百五十七名、頗る盛なりしと、又同會は每年春季一回開會することに決せり。

●富岡製絲所　は昨廿三年度の决算に際し、從前の損失は、悉く之を補塡し了り、全く運轉資本金二十万三千七百六圓七十六錢一厘を備ふることを得、且一万五千五百十七圓二錢の純益金を生じ、之を國庫に納付せんとすといへり。

●婦女數名にて遭難者を救ふ　本月五日、香川縣那珂郡砂彌島沖合にて、風雨の爲め二艘の遭難船あり、此時同島の水難救濟會員滿淵博氏は、此を認めて救はんが爲め水夫を招集せしに、孰れも漁業の爲め不在なるに困じ居たる內、遭難船は見る〳〵破損し已に乘船人は溺死せんとする危急の場合に迫りたるに、同島の婦女十五名は水夫二名を助て、二艘の小艇に乘組み勇を鼓して救濟したりと云ふ、其義氣膽力感ずべし、賞すべし。

●山口若子女史　茨城縣水戶區裁判所書記山口某氏の令孃若子女史は、此程東茨城高等小學校唱歌教師を委囑されたりと。

●太田婦人協會　茨城縣下の同會は、去る十四日、太田町字駒柵なる歸類寺に於て開會せり、藤花見物旁出席する婦人多く凡三四十名計りもありて、中々盛會なりしといふ。

●山梨縣尋常師範學校女子部生徒の養蠶　山梨縣に於ては、尤も早く女生徒に養蠶を鍊習せしむるの必要を感じ、既に一昨年より此事を實施せしが、本年も例の如く養蠶を鍊習せり、目下二眠後にて頗る宜しき景況なり、教師は縣下有名の八田達也、松間譜の二氏なり。

●山梨縣東八代郡に於ける養蠶雇男女の給料　目下の處、同所にては、雇男女の供給多く、需用少く、其日給最上等は、男十二錢、以下之に準ず、女は上等日給六錢五厘位なりといふ。

●岩手縣師範學校教員　千葉縣尋常師範學校教諭(月俸四拾五圓)に轉任せられ、東京工業學校卒業生小松幸太郞氏は、同校教諭(月俸二十五圓)に任ぜられたり。

●女子と園藝　女子にして園藝者なるものは十九世紀特有の產物といふ可し、嘗てアレキサンドラの諸女學校に於て女子に園藝の事を教へし例に習らひ、ダブリン、ハロウエー諸女學校にても新たに講師を入れ、園藝の事を教授するよし。

●アズ孃　北ロンドンに有名なる女子教育家アズ孃は園藝の事に精練博通なるチヤムパレーン夫人を雇ひ、此事につき卒業生を召集して演說せしめしよし、其結果甚だよかりし故更らに其演說を再び現在生徒に述べくれと依賴せしとなり。

●サマーセツト女史　は英國婦人禁酒會員三万人と共に議し各國の監督に書を寄せ、日曜日に酒店を閉づる事につき一層盡力し吳れよと傳へたり。監督も多くは喜びて諾せしと。

週報

●官令　十六日勅令第四十六號、緊急の必要ありと認めさせられ樞密顧問官の諮詢を經て帝國憲法第八條に依り新聞雜誌又は文書圖畫に關する件を裁可公布せらる●二十日內務省令第五號にて日本藥局法改正公布せらる。

●政治　十日條諧氏海に投じて死す●十三日天皇陛下京都にて露國皇太子殿下に御對顏遊ばさる●同日內閣臨時會議●十四日露國皇太子神戶に歸る●十五日地價修正同盟大會大坂に開く●同日中正日報發行停止●十六日國民新聞發行停止●同日陸軍大臣伯爵大山巖氏樞密顧問官陸軍大將に任じ、第四團長陸軍中將高嶋鞆之助氏陸軍大臣に任ず●同日露太子に傷け奉りし巡査勳七等津田三藏の勳位被褫●十七日內閣臨時會議●十九日露國皇太子御歸國の途に就かせらる我天皇陛下送て神戶に行幸あらせらる●兇漢を斬り露帝を救ひ奉りし車夫勳賞並に賞金及び年金を日露兩方より賜はる●二十二日天皇陛下御還幸。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

品名	五月廿一日
白米（一円ニ付）	
一等米	一斗〇升〇合
二等米	一〇二
三等米	一〇九
四等米	一一三
五等米	一一八
正米（一円ニ付）	
越中米	一斗五升三合
越後米	一四五
美濃米	一四三
尾張米	一四四
一志米	一四〇
雜穀（一円ニ付）	
本貫大麥	二斗三升〇合
上州小麥	一五五
竹林麥	一三五
梅澤大豆	二一〇
青柳大豆	二〇〇
吟小豆	一五〇
白胡麻	一二四
黒胡麻	一四五
鹽（一円ニ付）	
赤穗	俵三七八
大鹽	三八五
本齋	五六五
新齋	六一五
醬油（一円ニ付）	樽 七分 七厘 八四 八八 一一二 一三〇 一六〇 一八〇 三一〇 二二〇 六六〇
最上	
極上	
上物	
中物	
並物	
味噌（一円ニ付）	
地製上白	貫六、八〇〇
同上赤	六、八〇〇
同紅赤	四、八〇〇

品名	五月廿一日
絹糸（一円ニ付）	円
本練花色	二三五
色物	二五〇
赤白	二四〇
延糸	二二五
芥子糸	二四五
薄色	二三〇
色物太練	二四五
羽二重糸	二四〇
極天上色物	二二五
紡績器械糸	四三〇
毛糸（十貫目ニ付）	円
鶴判	九八、〇〇
同染分	九八、〇〇
同中細	一一四、〇〇
同極細	一一四、〇〇
最上横文字印	一一一、〇〇
同染分	一一一、〇〇
同中細	一三三、〇〇
同極細	一三三、〇〇
靴下用極上	一二三、〇〇
同並物	八二、〇〇
眞綿（九貫目ニ付）	円
上入金	一三一、〇〇
並入金	一二六、〇〇
無銘	一二〇、〇〇
蚊帳（一張ニ付）	円
五六五尺	四、〇八
五七五尺二寸	五、一八
六八五尺五寸	六、二五
六九五尺八寸	七、〇一
七八同	七、二二
七九同	七、七六
七十六尺	八、六二
八十同	九、四〇
十〃同	一〇、六〇

品名	五月廿一日
製茶（一貫目ニ付）	円
新駿州天下一	二、六〇
同稀頭	二、〇〇
同大頭	一、五〇
同中頭	一、二〇
同中條	一、〇〇
新東京地廻稀頭	一、七五
同大頭	一、三〇
同中頭	一、二〇
同中條	一、〇〇
新狹山稀頭	二、一〇
同大頭	一、五五
同中頭	一、二〇
乾海苔（十帖ニ付）	円
洲崎極上	一、〇〇
大森同	一、〇〇
深川砂村同	一、〇〇
大師潮田同	八〇
炭（一俵ニ付）	
伊豆上	四、五〇
同中	五、五〇
同並	六、五〇
丸備上	二、二〇
角備上	二、八〇
水油（一樽ニ付）	円
地水	七、〇〇
胡麻	九、三〇
荏油	一一、三〇
桐油	六、五〇
綿油	六、二〇
坂水	八、一五
石油（一箱ニ付）	円
チヤスター	一、六五
デボース	一、六四
ホーキ	一、六八
ロシヤ	一、六二

每月一回發兌●一冊郵税共六錢

女學生

第十三號

女學雜誌社發行

女學生

至誠は白刄の如し……星野愼

まとひの蹤

青葉隨感……暗光子

哀れさよ……假名子

思ひのまゝ……可愛子

赤兒歌……雲峰子

迷夢……春風子

睦びの宗

勇婦……（女子學院）美津子

堀川邸の靜女……（頌榮女學校）高橋のふ子

都に上る路すがらの感……（明治女學校）鈴木げん子

困苦の燈端（下）……（女子學院）秋野すゝき

信を保て……（立教女學校）辻雨子

少女の心得……（東洋英和女學校）麻布よし子

Our Service to Our Country……（明治女學校）千住千代子

烈女……（越後高田女學校）赤非登貝子

五智に遊ぶ……（同上）京田節子　布施孝路

寄せぶみ

教育報知の寄書家馬渕生に告ぐ……川合信水

文話……星野忠直

赤染右衞門の傳……豐田伴

亡母、東都懷古、人世……みゆき生

墓鄉（四）……望鄉生

昔ばなし

壇浦後の安德帝……如是子

家庭廉價女學書類發行

女學雜誌社編輯

子供の談

紙數八十葉　郵税なし　定價十二錢

右は子供の爲になる好きお話にて、母親が言ひ聞かすに結構なる材料なり。第一、田舍音樂師。第二、韃の君。第三、熊と旅人。第四、風と日の喧嘩。第五、ハイ〳〵とダンイマ。第六、カンとクッド。第七、王にも勝てる人々。第八、母の愛。第九、柔順なる娘。第十、英雄の所業。第十一、ましき兄妹。第十二、正直な樵夫。第十三、慾婆。第十四、忠義の家來二人。第十五、不思議の新衣裳。第十六、小娘とガマ。第十七、尤も惡き所行。第十八、正直なる小娘。

西洋女禮

紙數六十七葉　郵税なし　定價十二錢

右は、婦人紹介の事。婦人書面紹介の事。婦人訪問名刺の事。婦人會話の事。婦人案内の事。散歩、かざり、宴會の事。食卓上の心得の事。婚姻の事。客を遇する事などに分ち、西洋貴婦人の心得を一と通り平易に解明したり。

女子生理

紙數百九十葉　郵税なし　定價廿五錢

右は、月經の事。懷姙の事。分娩の事。の三つに分ちて、くはしく女の生理の事を説き。且つ長谷川泰氏が婦人病の元因、村岡範爲馳氏が眼鏡の話と云へる二つの論を附錄としたるもの也。

和畵案内

紙數百廿葉　郵税なし　定價五錢

右は八木兼辰氏の講述にかゝるものなり。

見育て草

紙數百六十葉　郵税なし　定價二十錢

右は育見の心得を問答躰にして、人の氣のつかぬ細かなる事迄で一々説明し、母として子を育つる總ての心得を悉とく講述したり。

邦文學

紙數百六十葉　郵税なし　定價二十錢

右は同志社教師松山高吉君が講述にして、和文躰の文法、語格を、極めて細密に説明したるもの也。

女學雜誌大安賣

第百號より、第二百號に至る迄、欠號なく調ひ居るもの多少有之候に付、**百卷**をば僅に**一圓五十錢**にて前例の如く賣拂ひ可申候、其后欠號まゝを生ずる分は**金一圓の**割にて相そろへ賣捌可申候但何れも八十冊にて一ヶ通りづゝ買入を要する義にて其内撰び取りは斷はり候、右百號より二百號に至る間には、出版の當時世を驚かしたる、「日本の家族」。「浮雲の細評」。「理想佳人」。「理想の紳士」。「家内經濟の大要」。「男女交際論」。「經濟雜誌記者との論戰」。「島田三郎氏米國よりの女界通信幾多」。「無名の英雄」。「戸内の戰死」。大鳥圭介氏、德富猪一郎氏、田口卯吉氏、光明寺三郎氏等の女子教育論。月の舍しのぶ氏が「哲女の卷」。「將來の和歌」。「將來の日本人民」。森有禮氏の「妻妾論」。「櫻花爛熳」。「滿目漠々」。饗庭篁村氏が最秀の自作小説とする「昔の夢」。「此大沙漠界一人の詩人あれよ」。「繪畫に於ける國粹保存主義」。「犧牲獻身」。「詩人」。若松しづ子が「忘れ形見」。等の極めて面白き甚だ益あるものを含めり。

雜俗諸躰 作文口授　全

鈴木弘恭口述

一名國文教科書

此書ハ大人カ各學校ニ於テ實地ニ授業シタル者ヲ筆記シタルナレバ國文ノ作例ハ勿論許多ノ熟語ヲモ擧ラレタリ此書ヲ一目セバ如何ナル初學ト雖ドモ消息記事論説諸躰ノ雅文ヲ立所ニナシ得ラルベシ諸君速ニ購テ試ミ給へ

女學雜誌社賣捌

廣告

一行	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

(廿七字詰)

定價

一冊。	六錢	郵税。五厘	(但府内無郵税)	
十一冊。	五拾八錢	郵税。五厘	(同前)	
半年分	壹圓四拾六錢	府外は	壹圓五拾六錢	
一年分	貳圓八拾六錢	府外は	貳圓八拾六錢	

東京市麹町區下六番町六番地

發行所　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三